

〔本朝醫談〕注能毒益母草の條に、唐より渡りたる濟陰方といふ文あり、濟陰方も、月湖の作なり、延寶八年の國刻あり、往年田澤仲舒が、全九集を校せし時、予其書に序して、月湖は本邦の人にして、錢塘に流寓したるといひしを、あからさまに錢塘月湖とあれば、邦人なりといふは、うけがたしといふ人あり、予全九集の文章、唐山人にあらざる句法を示し、今又濟陰方の序と、治驗とを茲に舉て、唐山人の文にあらざるをえらしむ、月湖元來邦人なれども、著述は唐土にて印刻なりし故、唐より渡りたる濟陰方と、一溪師のいはれしなるべし、足利の代禪徒の海外におもむきし者多し、月湖も其頃の人なれば、遠く明國に遊び、醫もて彼地に行はれしなり、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年十一月癸未、勅曰、如聞頃年、諸國博士醫師、多非其才、託請得選、非唯損政亦无益民、自今以後不得更然、其須講經生者、中醫生者大素、甲乙脈經、本草針生者素問、針經、明堂脈決、中並應任用、被任之後、所給公廩一年之分、必應令送本受業師、

〔續日本紀考證七〕大素、唐書藝文志、黃帝、甲乙脈經、醫疾令義解、脈經二卷、唐志本草、醫疾令義解、新修本草廿卷、延曆、五月、紀云、典藥察言、蘇敬、注新修本草、與陶隱居集、註本草、相檢增、一百餘條、亦今採用、草藥、既合、敬說、請行、用之、式部、式、凡醫生皆讀、蘇敬、新修本草、唐志、本草、七卷、張鼎、本草、二十卷、目錄、一卷、蘇敬、新修本草、二十一卷、農本草、三卷、雷公、撰神農本草、四卷、陶弘景、集註神農本草、七卷、張鼎、本草、二十卷、目錄、一卷、蘇敬、新修本草、二十一卷、

〔延喜式三十七〕凡應讀醫經者、大素經限四百六十日、新修本草三百十日、小品三百十日、明堂二百日、八十一難經六十日、其博士准大學博士、給酒食并燈油賞錢、

凡大素經准大經、新修本草准中經、小品、明堂、八十一難經並准小經、

善秀略 中

宗巴略 中

同正 天 十二年の春、馬氏が注する所の素問經を講ず、これより以前、本朝にいまだ此書を講